

第13章

宮の歴史と文化財



みやざきの位置

この地域の小中学校

小学校：宮小学校

中学校：宮中学校

第13章 宮の歴史と文化財

「宮」のある村

現在の佐世保市は、合併や編入を繰り返して今の大きさになっています。その大部分が江戸時代には平戸藩の一部でしたが、宮だけは太田藩の一部で、佐世保市になる前は、「宮」(宇都宮神社のこと)のある村、「宮村」と呼ばれていました。

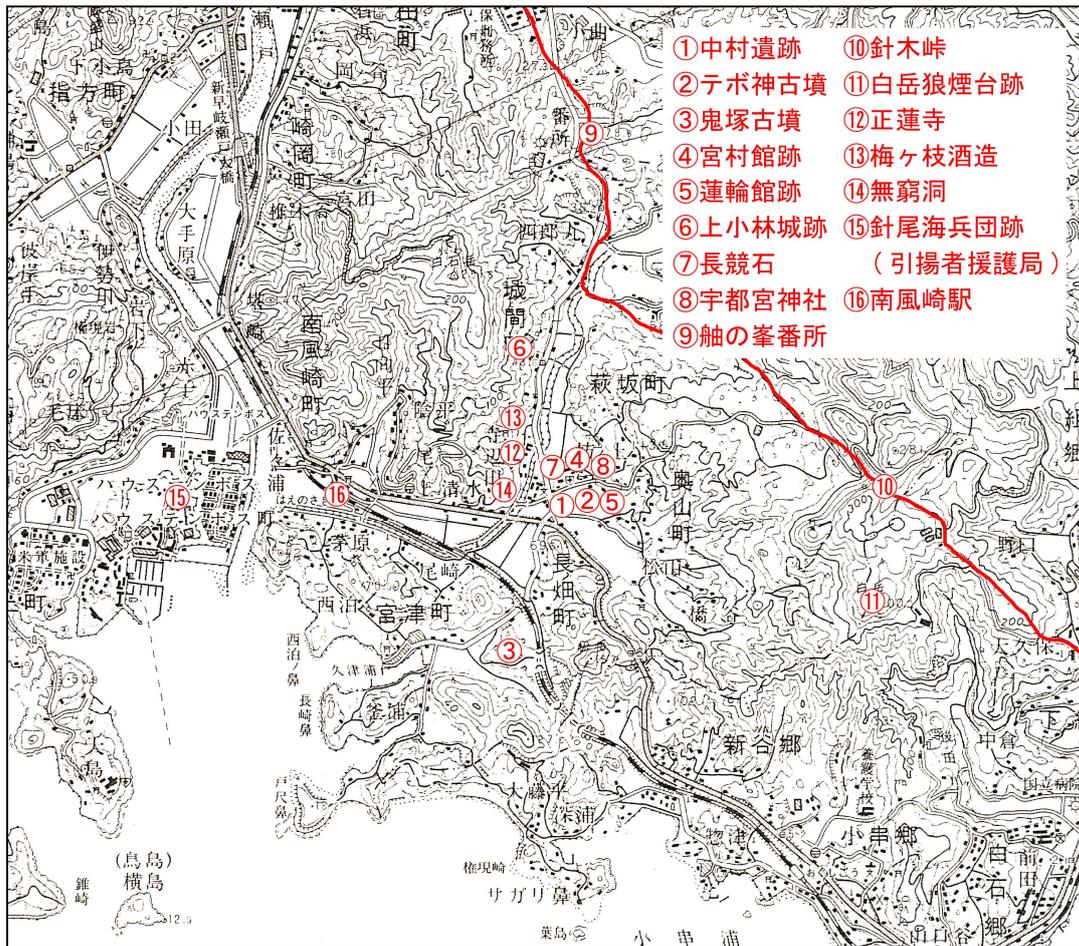
街の中心には宮村川が流れています。東彼杵郡波佐見町と川棚町との境界となる山地を水源として、大村湾へ注いでいます。

河口付近の南風崎町から、中流域の宮小・中学校や支所がある萩坂町あたりまでは広い水田が広がり、川を中心として集落や神社、お寺、そして多くの遺跡が分布しています。宮村川も相浦川(第4章相浦谷参照)と同じように、流域に豊かな文化を育んだのです。

また、海岸部の宮津町には、久津漁港があります。古くから農村であった地域に、海の生活も同居しているのです。



宮の全景



宮の地図

地名の由来

いい伝えによれば、鎌倉時代に関東地方の下野国（現在の栃木県）の武士であった宇都宮氏がこの地に移り住み、先祖を祭る宇都宮神社を建てたことから、「宮のある村」、つまり、「¹宮村」と呼ばれるようになったので、宇都宮氏も宮村氏を名乗るようになったということです。

1 「宮村」となる前は「父賀志村」と呼ばれていた。



宇都宮神社

宮には多くの火山があった



松岳

長畑の交差点から国道を川棚方面に向かうと、峠の手前の右側に松岳（標高157メートル）という尖った小山が見えてきます。一見かわいらしい山ですが、実は、火山活動で出来た溶岩ドームなのです。そのため、松岳からは溶岩の一種である黒曜石が採れます。松岳と同じような山は周りにいくつもあり、いつの頃か、たくさんの火山が盛んに噴煙を噴き上げていたのです。同じような小山は針尾島の北部にもあります。（第12章針尾島参照）

宮支所の川向こうには、太平洋戦争中に旧宮村国民学校（今の宮小学校）の生徒たちが掘った地下教室「無窮洞」がありますが、この岩盤は、火砕流による火山灰が固まってできた凝灰岩です。また、針尾橋入口の石切り場にも凝灰岩が現れています。これは、城間町の背後にある白石岳（標高261メートル）がやはり火山で、かつて、そのすそ野には火砕流が流れ下っていたことを物語っています。



雲仙普賢岳の火砕流

※写真提供：島原市市長公室広報係

火砕流とは、火山が噴出したガスと火山灰が高温、高速でそのすそ野に流れ下るもので、大きな災害をもたらします。1990年（平成2）の雲仙普賢岳の火砕流では、消防団員など44名の方が亡くなっています。江戸時代には、1783年（天明3）の浅間山の大噴火で数千人が死亡し、約2,000年前のイタリアでは、ベスビオ火山の大噴火により、ポンペイやエルコラーノなど、いくつもの都市が火砕流に飲み込まれて壊滅しています。

今は静かな農村風景が広がる宮も、かつては過酷な世界であったことを改めて知ることができるのです。

原始・古代の宮

宮には、旧石器時代(約25,000年前)から縄文時代(約12,000～2,500年前)にかけての遺跡がいくつか確認されていますが、遺物の量などは少なく、大きな遺跡ではありません。石器時代の宮は、あまり生活には向いていなかったのかもしれませんが。

ところが、稲作が始まる弥生時代になると、米作りに向けた低地が広がる萩坂町あたりに人々が住み着きました。



中村遺跡

中村遺跡もその一つです。水田の改良工事中に石棺7基と子供用甕棺1基からなる墓地が発見されました。

石棺は、宇都宮神社の周辺に見られる玄武岩の板石を箱形に組んで人を葬ったものです。

石棺には人骨は残っていませんでしたが、肩幅が入る50センチメートルの幅があることから大人用とわかります。しかし、石棺の長さは1メートルくらいしかありません。そのため、これらの石棺に葬られた人は膝を立てた格好で葬られました。これを「屈肢葬」といいます。

いくつかの石棺の中には土器が2副葬されていて、その土器の形式から、石棺が造られたのが弥生時代中期(約2,000年前)であることがわかりました。

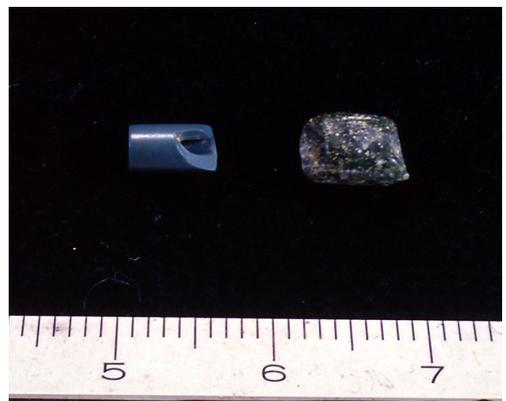
中村遺跡の石棺のうち、3号石棺は長さが50センチメートルしかなく、子供用だったことがわかります。頭のところからは、耳飾りと思われるヒスイと青メノウの玉2点が発見されました。子供の死を悲しんだ親が、せめてもの弔いに宝物だった玉で飾って葬ったのでしょう。足元には小さな壺も置かれていました。

弥生時代は身分の差が生まれる時代です。玉という貴重品を副葬していたのは、3号石棺だけでした。ひよっとすると、身分が高い人の子供が葬られたのかもしれませんが。

墓地があるということは、どこかに家や水田もあったはずですが、まだ見つかっていませんが、宇都宮神社の参道脇から土器が見つかったので、そのあたりにムラがあったのかもしれませんが。



3号石棺



3号石棺の玉

佐世保市博物館島瀬美術センター所蔵

2 死者を葬る時に、一緒に品物を埋めること。生前の愛用品や副葬用の特製品を埋めることが多い。

コラム～石棺のはなし～

石棺は縄文時代晩期から現れ、古墳時代まで続く埋葬の一形式である。石棺の前半期は足を折り曲げた「屈肢葬」、後半は足を伸ばした「伸展葬」となる。

人が亡くなることはいつの時代でも大きな出来事である。そのため、弥生時代では石棺や甕棺、木棺などで埋葬している。なかには、そのまま穴を掘った土坑墓もある。そして、人が身に付けていた装身具、死者に供えた副葬品も同時に出土して、当時の人の形質や文化を直接知ることができるため、石棺に限らず墓は遺跡のなかでも特に重要視される。



屈肢葬(左)と伸展葬(右):共に宮ノ本遺跡(高島町)

豪族が現れる

弥生時代のクニ、³邪馬台国の女王⁴卑弥呼は西暦248年頃に亡くなっています。その頃を境に、古墳時代へと時代は移っていきます。

西暦500年頃、やはり萩坂に古墳が造られました。⁵テボ神古墳です。古墳とは、高い盛土を持ったお墓で、地方では豪族などの支配者、中央では天皇をはじめとする有力者が盛んに造りました。古墳がたくさん造られたので、この時代を「古墳時代」と呼ぶようになりました。



テボ神古墳

テボ神古墳は、造られたころは直径10メートル、高さ2メートルほどの円墳であったと思われます。盛土はすでに失われていましたが、その中心にあった石室が残っていました。

石室は幅180センチメートル、奥行きは190センチメートルで、大形の板石で囲った部屋になっています。石室の床には砂利が敷かれていて、ここに死者を安置していました。埋葬は上下2面ありました。

つまり、一族を埋葬するうち床面が一杯になってしまい、その上に新たに石を敷いて床を造り、埋葬を行っていたのです。

3 弥生時代の日本にあった小国の連合体。中国の歴史書『魏志』倭人伝などに記述がみられる。

4 邪馬台国の女王。鬼道(呪術)により人々を支配した。中国の魏より「親魏倭王」の称号と銅鏡100枚を得たという。

5 「テボ」とは竹で編んだ丸い籠のこと。古墳の墳丘がテボを伏せたように見えたことが名前の由来かもしれない。

この床面からは、銀の耳飾り、ガラス玉、メノウの勾玉、水晶玉などの装身具や刀子などの武器、そして、当時の焼き物の須恵器が発見されました。玉などは死者が身に付けていたもの、その他のものは死者とともに埋めた副葬品です。



テボ神古墳出土品

佐世保市博物館島瀬美術センター所蔵

骨は残っていませんでしたが、耳飾りや玉の位置などから、6人以上の人が数世代にわたって葬られていたことがわかりました。

テボ神古墳は、当時の宮を支配した豪族の家族墓と考えられています。宇都宮神社前の緩やかな斜面にあって、高い盛土はどこからでも見え、周囲を圧倒していたことでしょう。それが豪族の権力の象徴でもあったのです。



萩坂公園の石棺と宮村館の土塁

テボ神古墳と同じ時代の小さな墓も発見されています。宮小学校と宇都宮神社の間にある萩坂公園は、室町時代の武士の館「宮村館」の跡ですが、この館を囲む土塁の下から石棺2基が見つっています。中村遺跡の弥生時代の石棺と同じ玄武岩で造られていますが、こちらの方は石材が整えられていました。

また、長さが160センチメートルと長く、体を伸ばした「伸展葬」による埋葬です。石棺からは、人骨も副葬品も見つかりませんでした。

中村遺跡の東側の台地に「蓮輪館」と呼ばれる、やはり武士の館跡がありますが、この台地の先端部にも3基の石棺がありました。見つかったのは、大人用2基と子供用1基ですが、実際は、もっと多く埋まっていると思われます。石棺内部の調査は行われていません。

テボ神古墳と2カ所の石棺群は、ほぼ同じ時代と思われます。つまり、テボ神古墳に葬られた人が地域を支配する豪族で、石棺群は支配された人たちと考えられます。しかし、さらに墓も造ってもらえなかった人たちもいたかもしれないのです。

鬼塚古墳

宮津港から長畑町に向かう市道は、小さな谷を登ります。その谷の中ほどのミカン畑の中に、鬼塚古墳(円墳)があります。

名前のおおりに鬼の墓という伝承があります。

それは、直径15メートル、高さ3メートルの墳丘が、堂々としていて、人が造ったものとは想像できないため、鬼の墓という伝承が生まれたのでしょう。



鬼塚古墳



鬼塚古墳の石室と出土遺物

2013年(平成25)に発掘調査が行われ、それまで不明だった石室を確認することができました。驚いたことに石室は盗掘されておらず、青銅鏡や鉄の武具などの副葬品が出土しました。

この古墳は、久津港を見下ろす丘にあることから、海に關係した豪族で、萩坂町のテボ神古墳と同じ豪族の墓かもしれません。

佐世保市内には、江上町の松ヶ崎古墳(第12章針尾島参照)や広田町の三島山古墳(第8章早岐、第9章広田参照)、そしてテボ神古墳があるものの、いずれも盛土は失われています。そのため鬼塚古墳は、当時の古墳の様子を知ることができる貴重な遺跡です。

武士が現れる

テボ神古墳の石室の中には、付近を開拓したときに出た石などが集められていましたが、それに混じって平安時代の焼き物もありました。どうやら、古墳時代に続いて人が住んでいたことは確かかなようですが、詳しいことは分かっていません。

宮の歴史に人名が現れるのは、13世紀の終わり頃になります。宮村通兼という武士です。当時の宮村は、京都の貴族や寺、神社が経営する彼杵荘と呼ばれる⁶荘園の一部でした。その荘園の各地に武士がいて、地域を支配していたようです。

⁶ 貴族や寺、神社がもつ田畑のこと。地方の有力者は、税を逃れるために、自分が切り開いた田畑を貴族や寺、神社に寄付し、その管理人となった。

1299年(永仁7)、その莊園しやうえんの持ち主が代わった時に、宮村通兼みやむらみちかねは土地のことで莊園を管理する役人と争いを起こし、博多にあった鎌倉幕府の役所である鎮西探題が判決を下しています。通兼は不満だったようですが、川棚道盛かわたなみちもり(川棚の武士)や早岐広能はやさきひろのり(早岐の武士)が判決に同意したので、しかたなく従ったようです。

ちょうどその頃のお墓が、宇都宮神社の近くから発見されています。正和2年(1313)の銘がある五輪塔です。大変立派な墓石ですから、宮村氏みやむらじに関係があるのかもしれませんが。今は宮地区公民館みやちくこうみんかんに展示されています。



正和2年銘の五輪塔

宮村氏、鐘を造る



医王寺の鐘

1362年(正平17)の⁷彼柁一揆連判状そのぎいつきれんぼんじょうに宮村通景みやむらみちかげの名前が見えます。先に登場した宮村通兼みやむらみちかねの孫かひ孫でしょう。さらに、宮村通茂みやむらみちしげ、通治みちはる、通種みちたね、通宣みちのぶの名もあります。宮村氏は代々名前に「通」の字を使っています。

その後、宮村通景は1376年(永和2)に宮村神社(宇都宮神社?)に鐘を寄進しています。この鐘は、今は佐賀県唐津市相知町の医王寺いおうじにあります。高さが70センチメートルを超える優美な鐘で、佐賀県の文化財に指定されています。このような鐘を造るには財力ざいりよくがいります。宮村氏は、相当なお金持ちだったのでしょう。

7 宮村氏などの武士たちは、小さい勢力だったので、お互いに同盟関係を結ぶために文書で契約した。これを「一揆契諾」という。

宮村館と蓮輪館

宮小学校と宇都宮神社の間にある丘に宮村館跡があります。丘は切り通しになって道路が通っていますが、これはもともと空堀だったようです。館跡は現在菰坂公園からぼりになっていますが、当時はここに館がありました。周囲は土塁が囲っていますが、宮小学校の方角は切り開かれて見晴らしがきくようになっています。



みやむらやかたあとえんぼう
宮村館跡遠望

萩坂公園を整備したとき、背後の土手の下から古墳時代の石棺が2基発見されました。そのためこの土手が高さ3メートルを超える土塁であることが分かったのです。

もう一つの蓮輪館は、中村遺跡の東側の低い丘にあります。山から続く丘陵の途中を掘り切って孤立した丘にしています。現在この堀切がそのまま水田となっていて残っています。蓮輪館は、江戸時代に畑か水田になっていて土塁などは残っていません。



蓮輪館跡

1989年(平成元)に行われた試掘調査では、14世紀の室町時代の建物跡や陶磁器、滑石製の石鍋、ファイゴの羽口などが発見されました。ファイゴの羽口は、鉄製品を作る鍛冶に使われるもので、蓮輪館で鉄製の武器などが製作されていたことを物語っています。当時は鉄製品があまり出回っておらず、武士は自分たちで武器や農具を作っていました。

そのため、このファイゴの羽口は、蓮輪館が豪族の館であったことを示す証拠品となっているのです。

両館とも、鎌倉時代に現れた武士、宮村氏の住まいだったと思われます。宮村館の方は調査が行われていないため、正確な時期は分かりませんが、小高い丘にあって高い土塁で防御していることから、14世紀の室町時代から15世紀の戦国時代頃となるでしょう。

宮村氏滅ぶ

15世紀の戦国時代になると、大村氏や平戸松浦氏が戦国大名として、その領地を広げてきます。宮村氏はその間にあったために、「七丸八城」といわれるほど多くの城や館を築いて守りを固めたと伝えられていますが、現在確認できるのは宮村館、蓮輪館、上小林城、小峰城の4つだけです。

上小林城は、城間町の標高90メートルの山の中腹にあって、空堀や土塁、平場などが残されています。また、長畑町の小峰山(標高69.6メートル)には、1475年(文明7)に宮村通定が築いた小峰城があったと記録にあります。現在山頂に残っている平坦な地形は城の遺構と考えられています。

宮村氏は、最終的には1480年(文明12)に大村氏に協力して、その支配下に入りましたが、1513年(永正10)に家臣の反乱で滅んでしまいました。



上小林城跡遠望

コラム～長競石の伝説～

宮小学校の校門前の道路脇に立っている高さ250センチメートル、幅1メートル、厚さ20センチメートルの大きくて平らな石は「長競石」と呼ばれ、宮村通定の子の悪四郎が、17歳の時に自分の背丈と力の強さを後世に伝えるために脇に抱えて持ってきたという伝説がある。

大きな石は悪四郎の身長を示し、隣の小さな石は座しているときの高さを示していると伝えられている。

悪四郎は1513年(永正10)、家臣の反乱により戦死し、宮村氏は滅んでしまった。この長競石は村人が悪四郎と妻の白子姫の死を悼んで建てたのかもしれない。

ところで、この長競石はテボ神古墳の石室の失われた部分と寸法が一致しており、テボ神古墳の石室の石材である可能性がある。古墳は盛土が失われると大きな石を組んだ石室が現れるので、しばしば石材が抜き取られ、石垣や記念碑に再利用されている。



長競石

戦国時代の宮村

宮村を支配していた宮村氏が滅んだので、1514年(永正11)に、大村氏は家臣の大村純次を宮村に配置しました。ところが、1569年(永禄12)になって純次の子、大村純種は大村氏に敵対している武雄の後藤氏についたために、大村氏は宮村を攻めたのです。

この戦いで、平戸方の援軍によって大村方は破れました(葛ノ峠の戦い)。このとき、大村氏の家臣の大村源次郎純定や小佐々弾正と甚五郎は戦死しています。大村純定の墓は宮津、小佐々弾正の墓は南風崎にあります。



正蓮寺

この頃の大村氏の当主は、日本最初のキリシタン大名となったことで有名な大村純忠です。領主がカトリック信者となったため、領内にカトリックが広まり、6万人もの信者がいたそうです。宮村にも当然カトリック信者がいたことになりました。カトリック信者となった純忠は、領内の寺をことごとく破壊しています。江戸時代とは逆の、仏教弾圧が行われていたのです。

1574年(天正2)に、宮村でも城間町にあった崇聖寺が焼き払われています。崇聖寺の本尊だった阿弥陀如来座像は、岡尾張という人物によって救い出され、今では同じく城間町にある正蓮寺の本尊となっています。

カトリック信者がいたのですからカトリック様式の墓もあったはずですが、今のところ見つかっていません。

この地方で戦国時代最後の戦いは、1586年(天正14)に起こった井手平城と広田城の戦いです。大村方がかつての領地を取り戻そうとして、平戸方の二つの城を攻めたのです。(第9章広田、第11章三川内参照)

この戦いで、大村方は井手平城を落として広田城を包囲しましたが、平戸方の援軍により追い返されてしまいました。その後、話し合いによって両方が藩境と決めたのが舳ノ峯峠です。これより、江戸時代の宮村は、大村藩の一部として、長く平和な時代を迎えました。



舳ノ峯番所跡

江戸時代の宮村

江戸時代の宮は宇都宮神社や正蓮寺のほか、庄屋(旧宮小学校跡)、農家が散在する静かな村でした。大村湾に面した宮津では漁業が盛んでした。

江戸時代になると、川の河口付近の干潟を干拓して盛んに新田が造られました。南風崎の駅付近は、1750年頃(宝暦年間)に干拓によって水田に変わったのです。



梅ヶ枝酒造

味噌や醤油などは農家で作ることもありましたが、酒は専門の酒屋が作っていました。主な宿場や村には必ず一軒は造り酒屋があったのです。

城間町の梅ヶ枝酒造は、江戸時代の半ばから続く由緒ある造り酒屋です。現在残っている建物は、1860年(安政7)に建てられたものが含まれ、主屋や仕込み蔵などがあります。造り酒屋の特徴として、いずれの建物も大きく見応えがあり、国の登録文化財となっています。近年、このうちの旧仕込み蔵と旧むろ(もろみを発酵させる建物)の修理が行われ、見学できるようになりました。

藩境となった舳ノ峯峠には、舳ノ峯番所が置かれていました。平戸と長崎を結んだ平戸往還(街道)も、広田から舳ノ峯番所を過ぎると、大村領に入ります。往還は瀬道町から宮村川を渡って川棚に抜ける針木峠へ向かって、山を登って行きます。明治時代以降、往還沿いの市街化が進んだため、昔の面影が失われた部分が多いのですが、針木峠の手前付近は当時の姿をよく残しています。



針木峠付近の平戸往還

てつどう 鉄道ができる

明治時代に入ると、庄屋屋敷が小学校になるなど、小さな変化はありましたが、ほとんどの人は、江戸時代と変わらない生活を送っていました。

ところが、佐世保に軍港が置かれることになると、長崎と佐世保を結ぶ鉄道の建設が始まり、宮村も徐々に近代化の道を歩むことになります。1898年(明治31)には南風崎駅が開業し、大正時代には久津漁港が遠洋漁業の基地として賑わいました。



はえのさき
南風崎トンネル(明治30年完成)



えんようぎょぎょう
遠洋漁業の記念碑

せんそう みやむら 戦争と宮村

明治時代以降、日本は海外進出を目指し、何度も戦争を起こします。そのたびに、宮村からもたくさんの若者たちが出征しました。宮村から出征した人たちは、必ず宇都宮神社に武運長久を祈願したそうです。

また、太平洋戦争が激しさを増していた1943年(昭和18)、宮村国民学校(現市立宮小学校)の裏山に防空壕が掘りはじめられました。



むきゅうどうないぶ きょうだん
無窮洞内部(教壇)



むきゅうどうないぶ
無窮洞内部(カマド)

「無窮洞」と名付けられたこの防空壕は、主に国民学校の高等科(今の中学生)の生徒たちが掘り、作業は終戦の日まで続けました。全校生徒600人余りが入れるように、2つの地下教室と教壇、書類室、カマドなどが岩盤を削りだして造られ、避難中にも授業や生活ができるようになっています。入口が正面に2カ所あり、裏山に抜ける非常口まで備えられています。

実際に空襲のときは全校生徒が避難したため、酸欠状態になり、農具の「唐箕」で風を送ったというエピソードもあります。

無窮洞は、防空壕というより「地下教室」と呼べるもので、数百人が入れる巨大なものを、ほとんど子どもたちの力だけで掘り抜いたという事実と、戦争末期の極限状態においても教育を重視したことを今に伝える貴重な戦争遺跡となっています。



唐箕

- 8 ハンドルを回して風を送り、脱穀した後の米に混ざった籾殻やごみを吹き飛ばす農具。江戸時代中頃から昭和30年代まで日本各地で使われていた。

引揚げと南風崎駅

宮村川の河口付近の南風崎町にあるJR南風崎駅は、1898年(明治31)に開業した静かな駅です。この静かな駅が、多いときは一日数千人の人で埋まったのが敗戦後の引揚げの時でした。



南風崎駅

1945年(昭和20)10月から、1948年(昭和23)6月まで、針尾の浦頭(第12章針尾島参照)に引揚げてきた140万人もの人々は、引揚者援護局(旧針尾海兵団)で数日を過ごした後、この南風崎駅から、それぞれの故郷に向けて汽車に乗ったのです。南風崎駅は、引揚げてきた人々にとって、戦後の再出発の第一歩を踏み出した地なのです。

地域の年表

時代	出来事
弥生時代	2,200年前 萩坂一帯にムラができる。中村遺跡の共同墓地成立。
古墳時代	500年頃 テボ神・鬼塚古墳成立、宮村館・蓮輪館石棺墓成立。
鎌倉時代	
1299年(永仁7)	宮村諸次郎通兼が鎮西探題裁許状に現れる。
1326年(嘉暦元)	彼杵荘浦々実検査帳に父賀志浦(宮村の古名)が現れる。
室町時代	
1362年(正平17)	彼杵一揆連判状に宮村通景ら、宮村の武士が名を連ねる。
1376年(永和2)	宮村通景は宮村神社(宇都宮神社?)に鐘を寄進する。
戦国時代	
1480年(文明12)	宮村通定が大村純伊と同盟する。
1513年(永正10)	宮村通定が家臣の反乱で宮村を逃れ、滅びる。
1514年(永正11)	大村純忠が、大村純次を宮村地頭に任ずる。
1569年(永祿12)	宮村地頭大村純種が大村純忠から離反し、葛ノ峠の戦いが起こる。
1574年(天正2)	大村純忠が、キリシタンに命じて宮村の寺を焼かせる。
1586年(天正14)	大村と平戸の藩境が決まり、舂ノ峯番所ができる。
江戸時代	
1605年(慶長10)	宮崎八郎左衛門が宇都宮神社を再建。
1668年(寛文8)	萩坂六郎兵衛が六郎堤を造る。
1750頃(宝暦年間)	尾崎新田の潮止堤防完成。
1809年(文化6)	外国船の警備のために狼煙場が白岳山頂にできる。
近代	
1874年(明治7)	庄屋跡に小学校ができる。
1897年(明治30)	鉄道が宮村を通り、南風崎駅ができる。
1943年(昭和18)	無窮洞の掘削が始まる。
現代	
1945年(昭和20)	南風崎駅からたくさんの引揚者が故郷へと帰る。
1958年(昭和33)	宮村は佐世保市に編入される。
2001年(平成13)	梅ヶ枝酒造、登録文化財となる。
2002年(平成14)	無窮洞の整備が完了し、公開される。
2011年(平成23)	梅ヶ枝酒造の旧仕込み蔵、旧むろの修理が完了する。